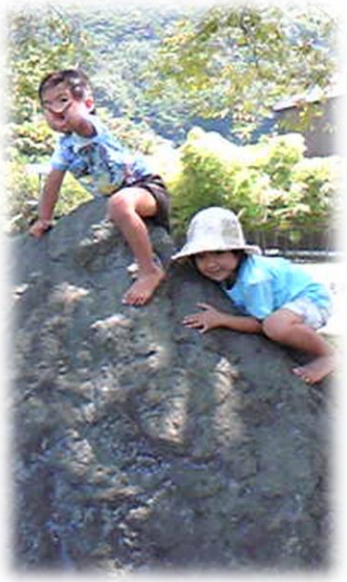
第149号 たけの子だより 2022年6月2日

たけの子誕生物語②

2009年4月、青空保育たけの子は福島市に仲間7人と創立しました。福島県青少年会館の芝生の上で、園児ひとりとその保護者、そしてスタッフ7人とで入園式をしたことを今も鮮明に覚えています。

日本の森のようちえんや野外保育の多くは、保護者さんたちの自主保育で運営されています。これは、北欧などと教育事情が違い、自由な幼児保育に対する政府の考え方が違うからと思われます。そういう枠組みに捕らわれない保育（保育に限らずですが）はマジョリティ（多数派）を大事にしている国では補助を受けにくい仕組みになっているとわたしは思います。

創立当時は森のようちえんというものがあることを知らず、「つくしんぼのような保育がしたい」と思っていたので、わたしたちはボランティアということではなく、仕事として、プロとしてたちあげようしていました。それで、ひとりだけの園児ではスタッフに最低賃金を払えないという問題に直面しました。でも、創立時のメンバーは本当にただ同然の賃金を理解してくれたのです。そこには



思いしかありませんでした。

2009年10月、わたしが所属していた福島コダーイ合唱団の音楽監督であった降矢先生の、「いつも学びなさい、大学も通信という学びがあるのよ」という教えを心にとめ、放送大学に入学しました。6年半かかりましたが、2016年に卒業し、学士を取得することができました。

2010年、わたしたちがしている保育形態は「森のようちえん」だよね、と出会った方から聞かれ、その時初めて「森のようちえん」というものを知りました。全国組織で森のようちえん全国ネットワーク連盟というものがあることも初めて知りました。わたしのお手本はあくまでも神奈川県の自主保育グループ「つくしんぼ」だったのです。同年に会津で週末に森のようちえんを開催し始めた方がいて、その方にセミナーに誘われ、そこで「森のムツレ協会」（日本野外生活推進協会）という組織があることも知りました。

様々な出会いによって、わたしがしていること、したいことが知識として裏付けされるようになっていきました。

園児も増え、ようやく認可外保育施設として届出を出せると思っていた矢先、2011年3月11日、東日本大震災がおきました。

その前から保健所に届け出のことで伺っていたのですが、「園舎が無い？ 理解できません。とにかく6人になったからきてください」とけんもほろろの対応でした。4月からは入園希望者もいることから、6名以上の園児になり、ようやく社会的にも認知されると喜んでいたのです。

震災とその直後に起きた原発事故はまさにわたしたちからすべてをもぎとっていきました。

わたしたちの園に入れるような保護者さん達の行動はすばやく、3月末にはそれぞれ一時的にしろ、みんな避難してちりぢりになってしまいました。中にはそのことがきっかけで離婚された方もいます。

創立から支えてくれていた保護者が癌で亡くなるということも起きました。3月中旬に手術を受ける予定だったのですが、震災とその後の放射能汚染の混乱で手術は延期。実家に戻り民間療法を続けていたのですが、1年余りでお亡くなりになってしまいました。彼女と一緒に歩んできた創立からの思いもあって、わたしはたけの子を続けていきたいと思っています。

震災からひと月あまり経った5月初旬、ひとりの園児が母親と一緒に避難先の北海道から福島に帰ってきました。あの、創立時にたったひとりの入園式をした園児でした。彼は年長さんになっていました。

この続きはまた次回に。

辺見妙子